

体験版

# 不知火

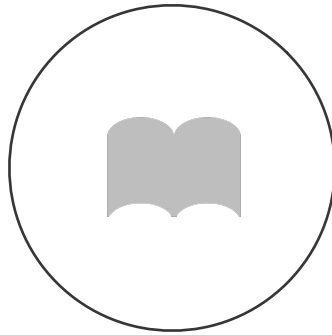
しらぬい

友野勇

GB

体験版

# 体験版



パソコンでご覧頂く場合

Adobe Reader（リーダー）のメニューから次の2つの項目をチェックします

- 1 『表示』 > 『ページ表示』 > 『見開きページ表示』
- 2 『表示』 > 『ページ表示』 > 『見開きページ表示で表紙を表示』

体験版



不知火

9

\*

あとがき

90

ゴリアテボックス作品のご紹介

95

体験版

體驗版

不知火

夕刻の私鉄電車には疲れて眠っているサラリーマンや制服でスマートフォンのゲームに熱中している学生らが、車両の振動に合わせて皆同じ調子で揺られている。車窓から見える空には梅雨の雲が重く低く這うように広がり、車内に立ちこめる蒸れた空気がスーツも制服も傘も鞆も全て灰色のモノクロームに映して暗い海の底のように黙々と漂う。……

「おい」と、突然内臓に響くような低い声で、座っている学生たちの前に立って睨みつけたのは身長一八〇センチを超える筋肉隆々の大柄な男である。梅雨寒のなか白いTシャツ一枚に履き古したジーンズ姿は、周囲の様相に不釣り合いな分目立っている。

「空けてくれるか」

男子学生はスマホを持ったままその坊主刈りの巨大な男を見上げると飛び上がってシートから離れた。両脇の二人の学生も目を合わさないようにしながら俯いて席を立った。

男は三人分空いたシートのその真ん中に座り首の筋肉を廻しながら周囲を見渡した。すぐに目をそらせた初老の主婦。無視する若いサラリーマン。少し何か言いたそうな壮年の男。…… 一樣にあたりを見渡すと男は腕を組んで不機嫌に目を閉じた。この男の、何か文句があるかと言わんばかりの態度に周囲の無関心を装う空気が淀んで車内は一層深い海の底へと沈んでいくようである。

森元裕太。この坊主頭の若者はついさつき恋男と離別れてきたばかりである。長いつき合いいではなかったが辛い傷心を味わった。話を切り出したのは裕太である。相手の孝志は最近の裕太の様子からそんな予感がしていたと言った。しかし諦めきれず、裕太にすがり三四才の年上

の男は涙を流した。

裕太はそういう恋愛に辟易へきえきしていた。孝志は男らしいガツチリとした体格で、もの静かな性格。知識も豊富で頼りたよりがいのある賢い男である。裕太を甘えさせることも喜ばせることも年上の男として当然のように為なしえ、心の大きさを持ち、包容力も裕太には十分だった。しかし……

孝志の心の奥にある芯しんが女のように柔らかく、孤独を背負いきれない人間の弱さみたいなものが、ふとした瞬間に露呈ろうていしてしまい裕太をがっかりさせるのだった。

何気ない裕太の横顔に寂しさを察して気遣う孝志。無言でいることに不安を抱きつまらない話をはじめめる孝志。そして愛を言葉で確認したがる孝志。……

一方裕太の孤独はもはや自己同一性として確立され、それこそが裕太の性質の一部であるといえた。過去の過あやまちも同性愛者であるということとも受け入れ、それをもって男として生きる

覚悟があつた。それは孝志には眩しく憧れる存在であつた。男に惚れる男は自分自身には無い内面の男らしさを求める。孝志が裕太に惚れたその瞬間とは様相でも体軀からだでもなく、ただ裕太が孤独を愛していたからに違いなかつた。そして皮肉にもそれが裕太と離別しなければならなかつた理由でもあつた。

男と生きていく意味を裕太は知らない。ましてや孤独を恐れない裕太にとつて二人でいることにどういう可能性があるのか想像すら出来ないのである。孝志はそんな裕太を、放埒ほうらちな猫を愛でる寂しい女のように愛したのだった。

普段冷静な孝志は惨めに取り乱し、裕太はこんな男とつき合っていたのかと驚いた。仕事の話をしているいつもの自信に満ちあふれた孝志は姿を消し、まるで見知らぬ街で迷子になった子供のような表情で裕太を見つめていた。孝志は孤独を恐れて泣いていた。

この世界を知ったところから男らしい男に憧れ

自分もそんな男になりたいと願った。身体を鍛え、強い男になるために格闘技を習練しプロを目指した。そしてそんな生き方の道すがら、周囲には同種の屈強な男たちが集い、いろんな男が裕太を愛した。

裕太は決して男に寄りかかることはなかった。好きである事は黙して信賴することだと信じた。だがしかしどの男も自分を大きく見せようとして虚勢を張って男らしく振る舞ったりした。それでも若い裕太は男の中にある心根を信じていた。そしてそれは誰もが持ち合わせている男らしさだと願った。

女言葉を使わなくても、たとえ瞳の奥に潤んだ艶を潜めていなくても、世の中には心が女である男が沢山いるということに落胆した。そうして裕太はつかみかけていた男と生きて行く意味を見失った。――

目を開けると電車の窓の外に知った風景が見えていた。最近行かなくなった野外の発展場あ

たり。孝志とつき合う前、気持ちの高ぶりを押さえきれなくなつて度々出かけた場所。この電車の高架橋下にある工事跡の資材置き場である。

電車が次の駅に近づき減速を始めると、裕太は気持ちにケリがつけられないまま無意識に立ち上がった。すると側にいたさっきの学生たちが視線を逸らしつつも、その空いた席を狙うように目の端で見えていた。

裕太はその学生たちを一瞥して睨みつけると、その横に立つている老女に声をかけた。

「ばあさん、ここ座んな」

老女の横に付き添っていた中年の太った女は裕太の行為に戸惑い、その威圧的なガタイに圧倒されて声も出なかったのだが、老女は少し腰を曲げて上目遣いに裕太を見ると、自然に表情を崩して屈託なく微笑んだ。

「ご親切にどうも」

老女は躊躇うことなく席に座り、付き添いの太った女はハンカチを鼻の下に当てたまま何度

も小刻みにお辞儀をしながらおずおずと座った。

駅の階段を下りてその高架橋下に沿って少し歩きはじめた頃にはもう自分の衝動的な行為を後悔していた。空はますますどんよりと曇り、今にも降り出しそうである。裕太はこんな日にいるはずもない同種の男を当てにして歩く自分の阿呆さ加減にげんなりした。そして自分から別れを言い出したにも関わらず、思いのほかこんなに動揺し、傷心しているのかと少し驚いていた。いや、それよりも男として信じていた孝志に裏切られたという身勝手な思いが強いのかもしれない。

線路の高架橋下に沿って続く細い歩道を歩いていくと橋桁工事跡を囲うフェンスが見えてくる。その鉄のフェンスは鉄道会社の所有する高架橋の真下の土地を護るように設置されている。そこを右に見ながら尚もまっすぐに進むと交差する古い用水路に遮られて歩道は行き止まりと

なった。三メートル幅ほどの用水路にはゴミが散乱し悪臭が漂っている。

裕太は用水路で途切れたフェンスの隙間をぬけてその工事跡の資材置き場に入った。この辿りついた高架橋の下は普段から薄暗く湿った空気が籠っているようだった。

ここに来るとこれまでの卑猥な記憶が蘇ってくるのだが、今の裕太には心を満たす淫靡な高揚は薄れ、ますますやりきれない思いがこみ上げてくる。

他の野外にある発展場とは違い、ここは昼間でも男と出会うことがある。すぐ真上に線路のレールが走り薄暗いとはいえこんな開放された所で男と素っ裸で抱き合ったこともある。衆人環視の中、資材を覆うブルーシートの上で数人の中年男に廻された快感も覚えているのだが。……

裕太は大きな溜め息をつく。と橋脚のコンクリートの隅にもたれかかりジーンズに手を引っ

## 体験版

かけて目を閉じた。

男と別れたその足でこんな所にやって来るなんて……。裕太は来ることのない卑俗な男たちの影を待ちながら用水路を流れる鉛色なまりの水を見つめた。以前よりも少し水量が増して流れの速くなった水面に生暖かい梅雨の風が漂っているようだ。

しばらくそうしているとあたりの空で微かにゴロゴロと雷鳴らいめいが聞こえ、地面に点々と水滴の粒が滲にじんで広がり、とうとう本格的に雨が降り出してきた。そして程なく裕太のいる高架橋下を残してその外のフェンスや歩道や雑草を灰色の雨が染めていった。

思いがけない一瞬はそのすぐ後に訪れた。

雨にけむるその先から二人の人影が見えた。

少し脚を開きガニ股またで歩く男と、身を固めて懐ふところに手をつつこんだ男。雨はますます激しくなりフェンスを超えて近づく男たちの足音をかき消した。

裕太はここで出会う奴らとは違う物腰の男たちに警戒けいかいの目をむけた。淫欲に飢えた男同士の駆け引きというこの世界独特の匂いにおをこの男たちから感じないのだ。

ガニ股の男の後ろから前に歩み出たもう一人の男は腰骨の小さな痩やせた男だ。暗い高架橋の影からうつすらと顔が見えるほどに近づくとその頬ほほの瘦こけた貧相な表情が強ばり、少し震えているのが見えた。

そして男は一重ひとえの陰暗な瞼まぶたを引きつらせながら、影って見えない裕太の顔を上目使いに窺うかがいつつその懐から腕を振り出して身構えた。その右手には鈍く光る短刀があつた。

「カッパの最期さいごがこんな臭くつせえ川つぺりたあ笑えるぜ」

痩せた男は一言そう言うのと腰を落として裕太に刃を向けた。しかし無理に笑ったその男の顔はひしゃげて泣いているようだった。裕太は訳が判らないまま間合いをとって二、三步後ずさ



りした。すると今度はもう一人橋脚の裏側から七、八十センチほどの棒ぼうを持った男が現れた。男は棒のエッジに金属の鈍い光沢を走らせながらゆつくりとにじり寄る。そうして裕太は橋脚のコンクリートを背にして三人の男たちに三方を包囲されてしまった。

三人の男たちは裕太の防御姿勢に警戒しつつも、じりじりと間をつめて追い込んでくる。隙すきをみて高架橋の下から逃のがれようにも、下手へたに裕太が動くとそれが合図となつて飛びかかつてくるかもしれない。もうどうすることも出来ず膠着こうちやくした状態が少し続いたその時。

「小島こじまあー、誰しやべと喋しゃべってんだ。おめえのあほたんは相変わらずだな」

その緊迫きんぱくした一瞬を切り裂きいた男の声。もう一人、四人目の男が現れたのだ。しかし姿は見えない。

短刀を裕太に向けていた痩せた男は目を見開き、後ろを振り向いたその瞬間、首がぐにやりと

折れ曲がり、身体が吹っ飛んで積まれていた資材の鋼鉄に打ち付けられた。暗がりの中、今瘦せた男を蹴けり終えた男の回転する脚と後ろ姿がぼんやりと見えた。

「イザワアー!!」

裕太の背後から最後に現れた男が鉄の棒を振り上げ、裕太の前を走って通り過ぎた。謎なぞの男は横にいたガニ股男の顔を躊躇ちゆうちよなくぶん殴なぐると、倒れそうになったその男の襟えりを掴つかんで引き上げた。

叫びながら走り込んで来る鉄棒を持った男に、謎の男はひるむことなく向き合々と、振り下ろされた鉄棒に身体を開いて掴んでいたガニ股男を盾たてにして少し腰を落とした。

ぐわしゃつと鈍い音がした。

ウツと叫んだのは鉄棒男だ。謎の男に振り落とした鉄棒はガニ股男の右肩に当たり骨を砕くだいた。

謎の男はガニ股男を捨てると両拳りょうこぶしを握ったま

ま鉄棒男に歩み寄った。

「目えつむつちゃあ当たたらねえぜ」

鉄棒男は「オワァー」つと怒鳴りながら力を込めて棒を振り上げるが、同時に謎の男は姿勢を低くして踏ん張り、右足を振り上げて駆け出すとそのまま突撃して男の腹に肩を食い込ませた。鉄棒男はその衝撃で棒を振り上げたまま用水路に飛ばされて落ちた。

用水路の側壁に頭を打ちつけ、歪んだ顔だけ水面に出して流されていく男を背にして振り返る謎の男。肩を碎かれたガニ股男は身体を丸めるようにしながら、すでに高架橋の下から飛び出して雨の中を走って逃げていた。謎の男は胸を大きく膨らませて今蹴り飛ばした小島と呼んだ男に歩み寄った。恐れて顔を真っ青にした瘦せた男は謎の男が近づくと前になんとか立ち上がり、鼻と口から血を吐きながらフェンスを飛び出した。しかしそれを執拗に追いかける男。何か叫んだが高架橋の外は大雨で声がかき消され

る。

何なんだよ、これは……

裕太の予期せぬ恐れや戸惑いは不快な怒りに変わり、その場に立ち尽くしたままその謎の男の背中を睨みつけた。

土砂降りの雨の中に立つその男に銀の靄が沸き立つと、びしょ濡れになった白のワイシャツやスラックスが身体に張り付き、一人の男のがつしりとした身体の輪郭を浮き上がらせた。

その男の後ろ姿は雨のノイズを背景にして銀幕に映した無声映画のようだった。

突然、強烈な閃光が走りあたりが真っ白になるとすぐ上で雷鳴が轟いた。高架橋の下影は真の黒となり、外は銀に輝いた。

そのとき裕太は見たのだ。その一瞬、雨水で張り付いた、その男の透けたシャツの背中、天に舞い上がる青龍の躍動を！ 墨絵のような単色の青で描かれた入れ墨は、盛り上がった肩の上から腰の下まで背中一面に広がって、艶やかな

鱗を纏った胴をくねらせる昇り龍が目を光らせて裕太を睨み返したのだ。

激しくうねる怒濤の海に現れた青龍は、今見事な曲線を描いて銀色の海原を飛翔する。まるで龍が嵐を呼び起こしたかのように風が吹き、荒れ狂う風は雨と共に雷鳴を呼ぶ。己の姿を雨の煙に隠しながら時折見せる鋭い爪で威嚇する。そして雷鳴が龍の咆哮となり立ち尽くす裕太の周りの空気を破壊して眼光を射した。

男がゆっくりと振り返る。龍の目は裕太を捉えたまま男の眼と重なって同化する。男の眼もまた龍のような激しさで妖獣の怪異な光を放つ。その細く切れ長の鋭い目が裕太を睨めつける。半身になったその肩は筋肉が発達し盛り上がっていて、力を溜めているかのように未だ二の腕を膨らませている。連続する雷光に映し出される男の影が漆黒の闇に反転し、橋脚のコンクリートに飛び散って裕太と交わる。

そして男は暗い高架橋の下にいる裕太の方へ

ゆっくりと歩み寄った。裕太は男に向けた視線を逸らさぬまま身を沈めてその動向を窺った。

男は裕太の近くまで来ると立ち止まり地面に目をやった。裕太はその男の視線につられて足下に視線を落した。するとそこに痩せた男が持っていた短刀が転がっていた。裕太は一つ踏み出すと膝を屈めて手をのばした。

「触るな」

男の少しかすれた声が暗い高架橋の下に響いた。

裕太はのびした腕を止めて男を見た。男は側に落ちていた古い新聞紙を拾って項を破き、それごと拾い上げると短刀を包んで後ろポケットに突っ込んだ。

「野郎、ドス放って逃げやがった」

男は誰に言うとはなしにつぶやくと、裕太を見ることなくその横を過ぎて橋脚の反対側へと歩いていった。

裕太は釈然としない一連の出来事をどう処理

すればいいのか判らず、堪<sup>たま</sup>らなくなつて無視して行こうとする謎の男に向かつて吼<sup>ほ</sup>えた。

「何なんだよ！」

男は裕太に背中を向けたまま立ち止まり、激しく降る雨を眺めたまま少しのあいだ何か考えているようだった。そして間もなくゆつくり振り返つた。

高架橋の上に電車が走る。車両の影とその隙間からもれる灰色の光が交互に映し出され、裕太とその男を高速に明滅させる。爆音を響かせながらフラッシュする男の眼はいつまでも裕太を放さず、電車が通り過ぎるまでその無骨で浅黒い顔を向けたまま沈黙<sup>ちんもく</sup>する。裕太は無愛想な男の眼が胸の中に無言で侵入する瞬間を感じるままに見つめ合つた。

やがて電車が去り、歩道に叩きつけられる雨の音に重なつて男の声が高架橋の下に反響する。

「おまえ一人か？」

稲光<sup>いなびかり</sup>に男のシルエットが浮かぶ。その瞬間、

雷鳴が轟き、いま裕太の人生に運命の稲妻が突き刺さつた。

\*

裕太が暮らしているアパートの部屋は二階にあった。

玄関先すぐに六畳ほどのダイニングキッチンがあり食卓テーブルが置かれていた。そしてその奥がフローリングの八畳間でベッドやテレビなどがある。

首にタオルをかけた入れ墨の男が八畳間の窓を少し開けて、外の様子を窺いながら携帯電話で誰かと話していた。裕太はキッチンテーブルの椅子に座り、奥の部屋にいるその男の背中をぼんやりと見ていた。今もさっきの光景が脳裏に焼き付いて離れない。

男の無表情の請<sup>こた</sup>いに裕太は無言で応え、そのまま部屋に連れてきてしまったのだが、来て

早々に電話で話しはじめ、裕太を放ったままもう二〇分は経つ。

「おっさん、厄介はごめんだぜ」

裕太は得体の知れない男に興味を抱きつつも警戒を解くことはなかった。男は携帯電話を外すとなお無表情のまま裕太をちらっと見たが、またすぐに電話を耳に当てた。

それから五分ほど話すと電話を切った。

「おまえ、俺と間違われたんだ」

男はそう言うのとまた窓の隙間から外を見た。

確かに裕太と同じような坊主頭で身長も高く肩や腕、胸の筋肉が発達している。

「ヤクザなのか？」

物怖じしない裕太の問いかけに男は少し反応するように頬を強ばらせたがやはり無表情のまま外を見ている。

「あの場所がどういうところか知ってんのかよ？」

最初ホモ狩りかと思っただぜ。へへ」

男は黙ったままだ。

「さっきの奴らって知り合いなのか？」

「……………」

「チエツ、まただんまりかよ」

興味本位で連れて来たが思うようにいかない男に裕太は少しイラついた。

「おっさん、カッパって呼ばれてんのかよ」

高架橋下で小島と呼ばれていた男が吐いた言葉思い出した。裕太は男の厳つい風貌とは似つかわしくないその呼称に苦笑いした。

するとその途端、男が突然キツチンにやって来て座っている裕太のシャツを鷲掴みにしながら、もの凄い力で引き上げ、額を裕太の顔面に押し付けた。

「てめえ、さっきから聞いてりや生意気な口利きやがつて。しょんべん臭せえガキがなめてんじゃねえぞ」

しかし、黙するも恐れ無し。裕太の変わらない眼光に男はなおも力をこめて押し続ける。

裕太は掴んでいる男の右腕を両手で押さえる



と回転させるように捻<sup>ひね</sup>り上げた。このまま肩まで廻せば、格闘技の技『脇固<sup>わきがた</sup>め』だ。しかし男はそれに耐<sup>た</sup>えながらその腕を自分の身体に引き込むように曲げようとする。

ギシギシと音をさせながら二人は固まり、顔と顔を押し付けながら目はお互いに逸らさぬまま睨<sup>にら</sup>み合う。男の顔面からは汗が噴き出し、歯をくいしばっているその音がギギギッと鳴った。

それは野獣のそれであつた。

男の発する体臭は雨で蒸れた土の臭いがした。裕太の鼻先に男の汗が滴<sup>したた</sup>り落ち、それが流れて頬を伝っていった。震える筋肉の硬さが裕太の両手に連動して肩を揺らした。

しかし格闘家のように防御するための技巧<sup>ぎこう</sup>も筋肉も持ち合わせていないこの男はこのまま耐え続けると肘<sup>ひじ</sup>から先が折れてしまう。裕太は男の底にある精神の強さに圧倒され、ほんの少しだけ力を緩<sup>ゆる</sup>めてしまった。

すると裕太は十五ほど歳の離れた無頼<sup>ぶらい</sup>な男に

気押<sup>けお</sup>されて、そのまま床に押さえつけられた。馬乗りになった男はそれでも力を緩めることはなかった。不利な体勢になつてしまいい腕に力が入らなくなった裕太の首に男の曲げた肘が食い込み、呼吸が苦しくなってきた。男の本気が狂気に変わりはじめていると裕太は感じた。しかしどうすることも出来ない。

唇が震える。耳鳴りがはじめ、少しの呼吸も出来なくなり、時間が止まったようにあたりが白々と色が薄<sup>うす</sup>らいでいくなか微かな男の声が聞こえた。

「あの場所か？ 知ってるさ。あそこは昔っから男漁<sup>あさ</sup>りするところだ」

裕太の身体が痙攣<sup>けいれん</sup>を始めゴツゴツと床を鳴らした。そして視界が飛んでその先にあるなにか安堵<sup>あんど</sup>するような気持ちを感じた瞬間、全身に虫が這<sup>は</sup>うように血管がのたうち回りながら血が再び一斉に流れ出した。男が力を抜いたのだ。裕太は目を見開き、喉<sup>のど</sup>を鳴らして止まっていた空

気を慌<sup>あわ</sup>てて吸い込んだ。痙攣<sup>おき</sup>は治まり指の先まで血が流れる感覚がよくわかった。

男は真剣な顔で裕太を見つめていた。いまだ頬を震わせ必死に呼吸する裕太の流す感情のない涙を指で辿<sup>たど</sup>り、この怖いもの知らずの若者を見下ろした。

若者は艶<sup>つや</sup>やかな肌色を取り戻し玉のような汗を弾<sup>はじ</sup>いてみせた。悲しみに流す涙とは違うこの若者の涙は純粹な輝きを魅<sup>み</sup>せていた。何かが破壊されたあとに再生される力強さは若者の特権である。男はこの一瞬、無意識に惹<sup>ひ</sup>かれて少し紫がかった裕太の震える唇に唇を合わせた。

命を取り戻したかのように放心する裕太は、血がそのまま一斉に逆流して別の新しい血と入れ替わったような錯覚を覚えた。それは素直なもう一人の裕太が全身に広がったようだった。裕太は瞬間、男の身体を力一杯抱きしめると男の口に舌を突っ込んで一つになろうとした。気がつくと裕太は背中の青龍にしがみつき声を無

くして号泣<sup>ごうきゅう</sup>していた。

どんなに探しても見つからない。どんなに追いかけても追いつかない。どんなに破壊しようとしても壊れない。裕太の人生に欠<sup>か</sup>けていた何か大きなものが今腕の中にあつた。

大雨で濡れた二人の身体は、湿気<sup>しけ</sup>って流れた汗と一緒に一つに解け合った。引きちぎるようにお互いの服を剥<sup>は</sup>ぎ取りキッチンで抱き合いながら男同士を貪<sup>むさぼ</sup>った。

男の地黒の肌が裕太のきめ細かな肌を支配すると、裕太の筋肉が男の身体を蹂躪<sup>じゅうりん</sup>した。裕太が仰<sup>あお</sup>向けになると男は大きくどつしりとした裕太の太腿<sup>ふともも</sup>を持ち上げ、尻の穴を上に向けてそこに顔を埋<sup>うづ</sup>めた。

男から湧き出る臭いと、喉<sup>のど</sup>を鳴らして肉をしやぶる声の音が獣<sup>けもの</sup>のように荒々しく、裕太の肉も骨も精神も喰<sup>く</sup>い尽くされてしまうほどに感じられた。

男の舌が裕太の穴の中に侵入するとそのまま

太く硬くなつて唾液と一緒に穴の周囲の緊張をほぐして強引に柔らかくしていく。男は顔を振りながらなおも裕太に押し付けてピチャピチャといやらしい音をたてる。

素っ裸で腿にボクサーブリーフを引つ掛けた裕太が仰向けのまま筋肉質なその太い脚を自ら上げ、脂あぶらののつたふくよかな腹さくらを晒して狂つたように男を誘う。

男は顔を上げるとその惨めなほど従順じゆうじゆんに成り下がった若い屈強な雄を見下ろしながら、すでに巨大化して反りそ勃たち、ぬるぬるになつて己の男根を握りしめて裕太に向けた。

裕太の穴は男の涎よだれを周りにべつとりつけて光り、男の肉棒がひくつく調子に合わせて口が開いたり閉じたりした。裕太は荒い息を吐いて男と肉棒を交互に見ながら、分厚い胸を開き、乳首を硬くして懇願こんがんした。

男の愛欲は性急で一方的でわがままだった。前儀も言葉もなく、ただ穴に突つ込むだけの

荒々しさだった。裕太は男の求める簡素な穴となつて存在していた。ただのおもちやのように床に転がつて太い肉の塊かたまりが挿入されるのを待つだけだった。

男は容赦ようしやない速さで男根を裕太の穴に突き入れ、根元まで深く押込んだまま腰を押しつけて一つになると、裕太ははあーつと喉の奥を鳴らして切ない感嘆かたんの声を漏らした。得体の知れない男が裕太の中で息づき、熱くなつてうねつていた。

死ぬ恐怖から解放された裕太の身体はいま欲望の坩堝るつぽと化し、最も生せいに近づこうとしているようだった。

裕太は脚を抱えたままその強靱な腹筋や背筋を使つて腰を上下させ、男のぬるぬるになつた肉棒を自ら出し入れした。穴は中から透明の腸汁を噴き出し、男の涎と混ざり合つて糸を引いた。

無心に腰を動かす裕太の恍惚こうこつとした表情を見



下ろしながら、男はそうぐめくおもちゃを乱暴に押し上げ、開いた穴から肉棒を抜いたり突っ込んだりして楽しんだ。抜いた穴は餌えさを欲しがる幼鳥のごとくぱつくりと口を開けて早く欲しいと啼ないた。

男にとって目の前のこのどうしようもない若い雄は欲望のはけ口でしかなかった。下半身に溜たまつた『汚いもの』を吐き出すだけの道具でしかなかったのだ。

裕太の興奮は男に無視され、やがて大量のザーメンが注入された。男はその瞬間、中腰になつて脚を大きく開き、肉棒を根元まで穴に差し込んだまま、身体を硬直させて裕太の大きな尻タブを掴つかんだ。一発、二発、三発、四発……

発射する度たびにうつと声を吐きながら、もの凄い勢いで男の精子は裕太のS状結腸の入口の腸壁に当たり、その度にツツツツと腹の内側が振動して熱くなつた。

「あ、ああ……」

しかし裕太の声は男には届かず、その快感さえも共有することはなかった。

男は自分の出した大量のザーメンを裕太の中に入れたまま、挿入した男根を抜くことなく再び上下させた。ぶりゅつぶりゅつと鈍にぶい音を立てて裕太の肛門が啼くと、男は腰の動きを速くしてそのいやらしい音をより大きくさせた。男の肉棒は硬くなつたまま穴の周りから白い汁を飛び散らして、その汁を潤滑油じゅんかつゆがわりに一層激しく出したり入れたりした。やがて完全に亀頭の先まで抜き出すとすぐに根元まで突っ込むを繰り返して、キツチンの床や裕太の胸、そして男自身の腹にザーメンを飛び散らした。

裕太は歯をくいしばり男の汗だくになつた真剣な顔を下から仰あおぎ見ながらその狂つたように動く腰の振動に耐えた。

すると突然男は掴んでいた裕太の太腿を離し、硬かたいままの男根を引き抜いた。解放された穴から太い放物線を描いてザーメンがびゅーつと一

筋吹き出したが、男は構わず仰向けのまま脚を抱えて背を丸めている裕太の分厚い胸板を足で押さえつけて後ろに倒すと、床に後頭部を打ちつけた裕太の頭に跨<sup>また</sup>がって腰を下ろした。

裕太の顔の上に屈<sup>かが</sup>むと同時に二度目の絶頂が訪れ、膨れ上がった亀頭の中から我慢出来ずにこぼしたザーメンを、その額<sup>ひたい</sup>や頬に撒き散らした。男はザーメンをだらしなく漏らしながら裕太の頭を左手で抱えて首をもたげると、腰を押し出してザーメンが出続けている亀頭を裕太の口にねじ込んでそのままじゅっじゅっと喉の奥まで突き入れた。裕太はなおも出続ける男の精子を今度は喉の奥に感じながら顔をザーメンだらけにして何度も飲み込んだ。

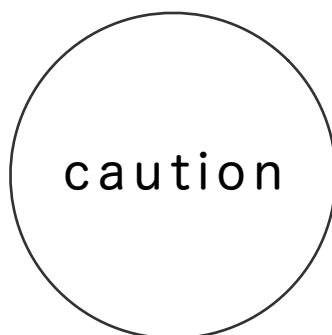
溜<sup>ため</sup>めていた『汚いもの』を全て出し終えると、男は身体を小さく震わせて立ち上がり少しのあいだ虚<sup>うつ</sup>ろな眼差<sup>なみ</sup>しで見上げる裕太の眼を黙<sup>もく</sup>って眺<sup>なが</sup>めていた。男の亀頭<sup>なみ</sup>の先から裕太の唇<sup>くちびる</sup>にかけて白い糸<sup>いと</sup>が滑<sup>ぬめ</sup>って繋が<sup>つな</sup>がっていた。

そうして男は急速にこの目の前の雄に興味を無くし、無表情のままバスルームへと消えて行<sup>い</sup>った。

裕太はそんな男の不誠実<sup>しじ</sup>さに痺<sup>しび</sup>れるような喜びを一瞬感じた。

つづく





この物語はフィクションです。実在の個人、団体、地域とは一切関係ありません。

この作品は空想物語です。公序良俗に反する行為や、性の描写について性感染症のリスクを伴う表現が含まれていますがこれらを推奨するものではありません。

性交渉においては正しい知識と判断で性感染症を予防しましょう。

体験版



## 不知火

2018 年 8 月 発表作品

---

著 者      とも の いさむ  
友 野      勇

サークル      ゴリアテボックス [ Goliath Box ]


当作品の文章、画像等の無断転載、また複製やネット共有へのアップロードなどを禁止します。

ホームページ・ブログ・ツイッターで作品の情報をお知らせしています。  
また小説投稿サイト「FC2 小説」で作品を発表しています。



[goliathbox.x.fc2.com](http://goliathbox.x.fc2.com)  
**site**  
GoliathBox

[goliathbox.blog.fc2.com](http://goliathbox.blog.fc2.com)  
**blog**  
GoliathBox



<https://novel.fc2.com/user/35498161/>  
**FC2小説**  
GoliathBox



@Tomono\_novel



# GB

## GoliathBox

サークル・ゴリアテボックス

### 作品のご紹介



It supports various terminals device.



ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 乾颯太郎淫行記 1

高校の先輩に誘われてラグビーを始めた颯太郎。

大学ではその逞しい身体と希有な運動神経で皆に期待されるが結果が伴わずに苦悩する。

そんな新人の颯太郎に性処理をさせながらも慈愛に似た感情を持ってしまう2年先輩の鴻野。ノーマルで男同士の愛情に戸惑いながらも颯太郎との関係は深く強くなっていく。

しかし一方で颯太郎は羞恥の快楽に目覚めて淫猥な世界に堕ちていくのだった。



## 官能中編小説

挿絵なし(場面 見取り図)

約 47,700 文字

新編集 (B5 判)

本編 87 ページ

全編 152 ページ

旧編集

PC 用 96 ページ

スマホ用 291 ページ

\*新編集版の全編にはその  
他の作品紹介も含まれて  
います

読む本  
じっくり





ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 乾颯太郎淫行記 2

ラグビーで鍛えたその身体が羞恥の快楽に溺れていく……。

暗闇の淫猥な世界の果てに見た男同士の恋愛は本当に存在するのだろうか。颯太郎の淫行の旅が続く。

乾颯太郎淫行記のシリーズ第2章です。

各章は新たなお話と登場人物によって完結していますので『乾颯太郎淫行記1』を読んでいない方もお楽しみ頂けます。



## 官能中編小説

挿絵なし(場面 見取り図)

約 45,000 文字

新編集 (B5 判)

本編 83 ページ

全編 148 ページ

旧編集

本編 315 ページ

全編 394 ページ

＊各全編にはその他の作品  
紹介も含まれています

読む本  
じっくり





ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 不知火

強く男らしい男を求める裕太。  
極道の世界を生きる伊沢。  
二人は強烈にぶつかり合い、交わり合いながらそれぞれの道を見いだしていく。

## 官能中編小説

挿絵なし(巻頭イラスト)

約 52,000 文字

新編集 (B5 判)

本編 93 ページ

全編 144 ページ

旧編集

本編 179 ページ

全編 272 ページ

\*各全編にはその他の作品紹介  
も含まれています



読む本  
じっくり





# あさなぎ

自販機の設置や管理をしている会社で高橋良二は営業部の主任を務めている。

部下の野田とは長年同じ業務を受け持つ先輩後輩の仲で、野田は良二を仕事の面でも人としても尊敬しているのだが、年上の大柄な男に引きつけられてしまう性癖を持った良二は、そんな年下の野田にも最近男として不思議な魅力を感じ始めていた。

ある日良二は自宅近くの公園で知らぬ男たちと淫猥な行為におよび、亡き父の影を引きずっていることと関係があるのだという思いに戸惑うのだった。

## 官能中編小説

挿絵なし

約 57,000 文字

新編集 (B5 判)

本編 93 ページ

全編 150 ページ

旧編集

PC 用 100 ページ

スマホ用 282 ページ

\*新編集版の全編にはその  
他の作品紹介も含まれて  
います

じっくり  
読む本





# ガチデブの俺が…

## 01 風呂のぞき ガチデブ作業員

最近 男が風呂場を覗いてるんです

## 02 秘湯 濡れた穴の真実

ガチデブの俺が山奥の温泉に行きました

## 03 ジム陵辱 ビジター体験

元ラグビー部ガチデブの俺が初めてのスポーツジムで常連の洗礼を受けました

## 04 ビデオ屋ガチムチ店員のおすすめ秘蔵映像

ガチデブの俺が変態店員のいるビデオ屋に行きました

## 05 臨時更衣室 真昼の情事

ガチデブの俺が変態クライアントの要望でゆるキャラになりました

## 06 銭湯ガン見 柔道部員罰ゲーム

ガチデブの俺が変態柔道部員のいる銭湯に行きました

## 07 早朝ジョギング

出会い系公衆便所

ガチデブの俺が変態ガチムチジョギング男と知り合いました

## 08 オフィスにお届け！

ガチムチ宅配サービス

ガチデブの俺が疑惑の宅配野郎と遭遇しました

## 09 車座セックス

廃品倉庫の快樂倶楽部

ガチデブの俺が変態倶楽部で輪姦されました

## 10 過激ビデオモデル

双子兄弟2本挿し！

ガチデブの俺が理想の男たちに掘られました

## 猥想短編小説集

挿絵なし(各タイトル表紙絵のみ)

約 57,800 文字

B5 判

本編 137 ページ

全編 200 ページ

\*全編にはその他の作品紹介も含まれています





# ガチデブの俺が 2

- 01 終電寝過ごし  
恐怖の深夜タクシー  
ガチデブの俺がノンケ運転手のタクシーに乗りました
- 02 下町工場  
ガチムチ技術工員の淫行  
ガチデブの俺が変態工員に遭遇しました
- 03 河川敷 変態画家のエチュード  
ガチデブの俺が絵画モデルになりました
- 04 男専マッサージ  
熊系エロエロコース  
ガチデブの俺がメンズマッサージサロンに行きました

- 05 童貞喪失？  
ラグビー部後輩ムッチリくん  
ガチデブの俺が部活の後輩と呑み会しました
- 06 海パン選び  
ムッチリ変態店員エロ試着  
ガチデブの俺が今年の水着を買いに行きました
- 07 公開挿入！  
ド淫乱カフェレストラン  
ガチデブの俺が衆人環視で中出しされました
- 08 深夜のコインランドリー  
露出交尾中毒  
ガチデブの俺が不審なド変態野郎の淫乱交尾を目撃しました
- 09 お試しプレイ  
アダルトショップで穴くらべ  
ガチデブの俺が公開アナニーで張り型を買いました
- 10 パーキングエリア  
変態トラックer輪姦  
ガチデブの俺がトラック野郎どもに中出し輪姦されました

## 猥想短編小説集

挿絵なし(各タイトル表紙絵のみ)

約 53,000 文字

B5 判

本編 137 ページ

全編 200 ページ

\*全編にはその他の作品紹介も含まれています





ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 実況！玄関目隠し 四つん這い穴待機！

ハッテン場でスタッフに声をかけられたガチムチ智也くん。  
好奇心旺盛な智也くんが玄関目隠し四つん這い待機に初挑戦！

スタッフはマンションの別の部屋からモニタリング。  
ヘッドセットマイクで智也くんに指示を出しながら隠しカメラで状況を見守る。  
なにかあったらマイクで知らせてね！っとはいいつつもスタッフから次から次へとえっちな指示が！

猥想短編小説

文／絵  
友野 勇



猥想短編小説

カラー  
エロ挿絵

17

枚

＊差分5枚含む

B5 判

本編 70 ページ

全編 132 ページ

＊全編にはその他の作品紹介も  
含まれています



## ゴリアテボックス 友野勇の小説

# エロドロ

全ページオールカラーのビジュアルノベル B5 判。  
人を騙して金を盗る悪いやつには制裁を！露出好きなら変態ヤツて  
るところをスマホでライブ配信しようぜ！エロすぎる英雄伝説  
ある郊外の小さな公園。その中にある公衆便所にはある噂が……  
秘めた男たちの社交を荒らす悪者に、制裁を行うヒーローが現れる  
という。男子便所の個室に書かれた文字。闇に隠れたサイトへアク  
セス。…  
いつ現れるのか誰にもわからない。その正体も謎につつまれている  
のだ。そんなある夜、その暗号めいた便所の落書きがあった。確かに  
「エロドロ」と書かれ、コードナンバーも。そうしてまた贖罪が行  
われる。罪と罰の名のもとに。……

## 猥想短編小説

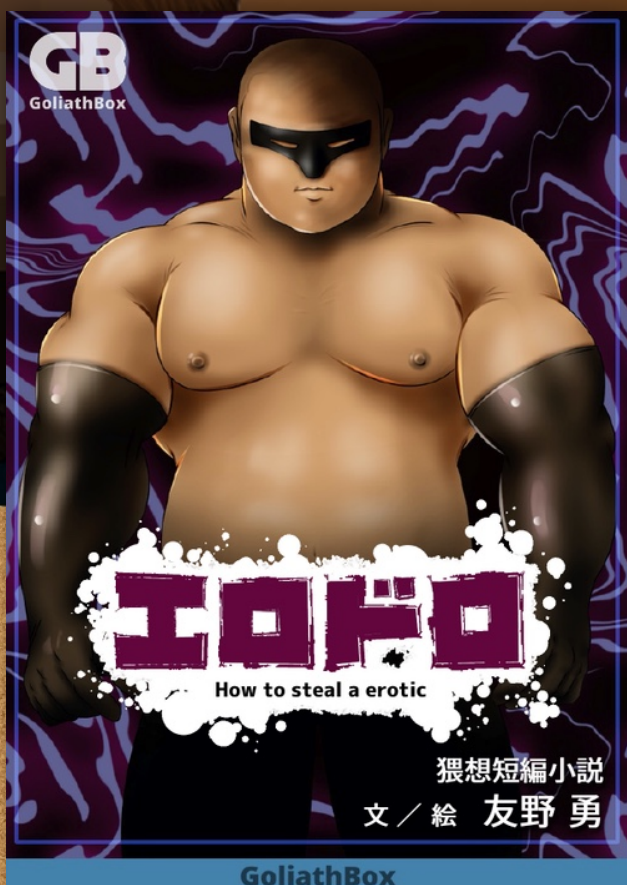
**全項カラーイラスト**  
(ビジュアルノベル)

B5 判

本編 75 ページ

全編 138 ページ

\*全編にはその他の作品紹介も  
含まれています





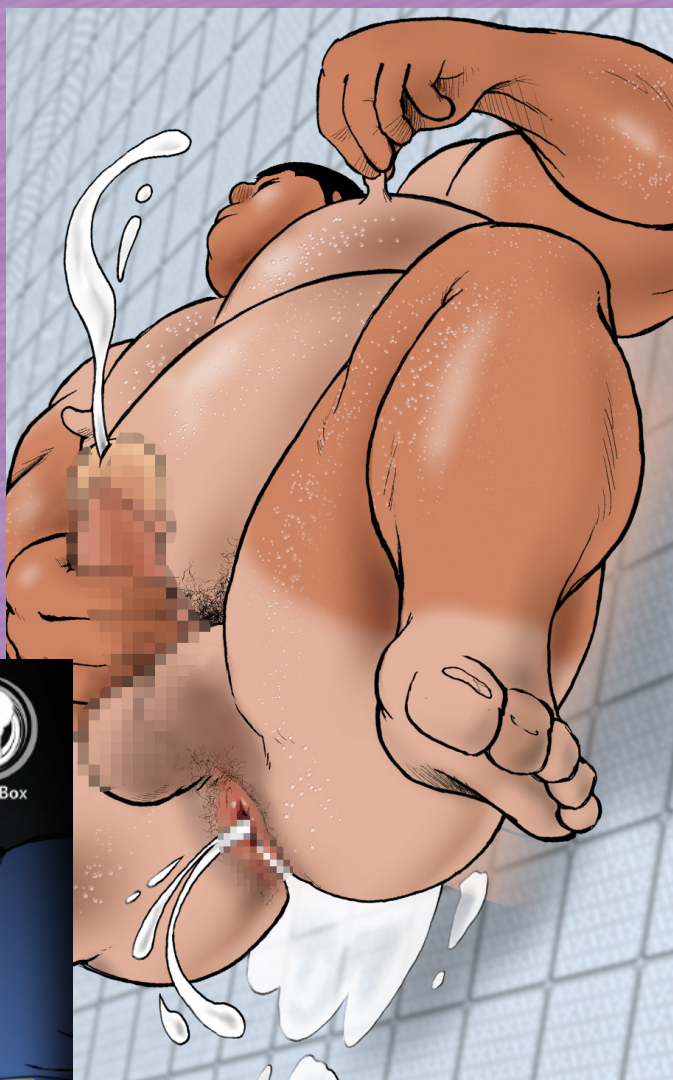
ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 猥想短編小説

カラー  
エロ挿絵

6

枚



耕太郎  
(仮名)

## ハッテン インタビュー

猥想短編小説 文/画 友野 勇

人知れず存在する秘密の社交場。そこへやってくる淫乱野郎に直接交渉。さまざまな話を聞きながらその実態を暴く。突撃ハッテン場インタビュー。真夜中の公園でヒマしてたガチデブの構太郎くん（仮名）この世界での体験を赤裸々にエロエロ告白してもらいました！



ゴリアテボックス  
友野勇の小説

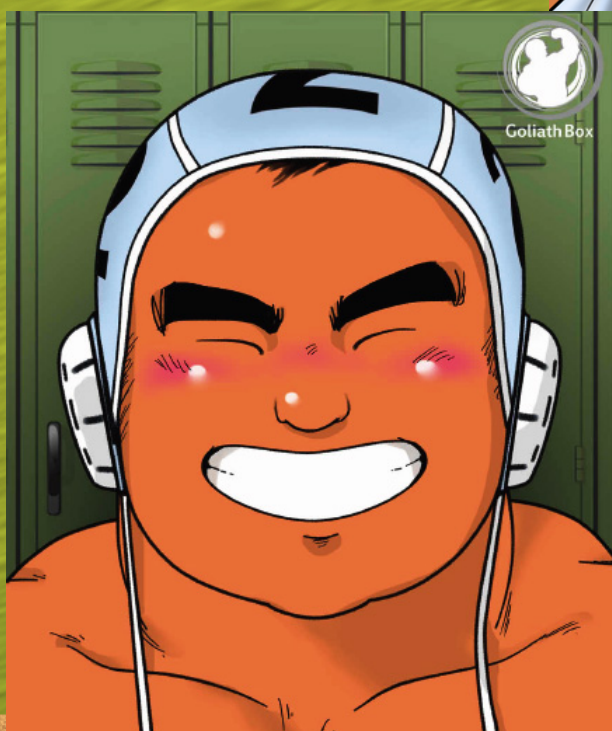
# 猥想短編小説

カラー  
エロ挿絵

11

枚

(差分5枚含む)



## 行列ができる 水球部員

猥想短編小説 文/画 友野 勇

街角の小さなタバコ屋でアルバイトする水球部員のマサル。訪れる客に謎のポイントカードを配布してなにやらスケベなサービスをしているらしいのだが……



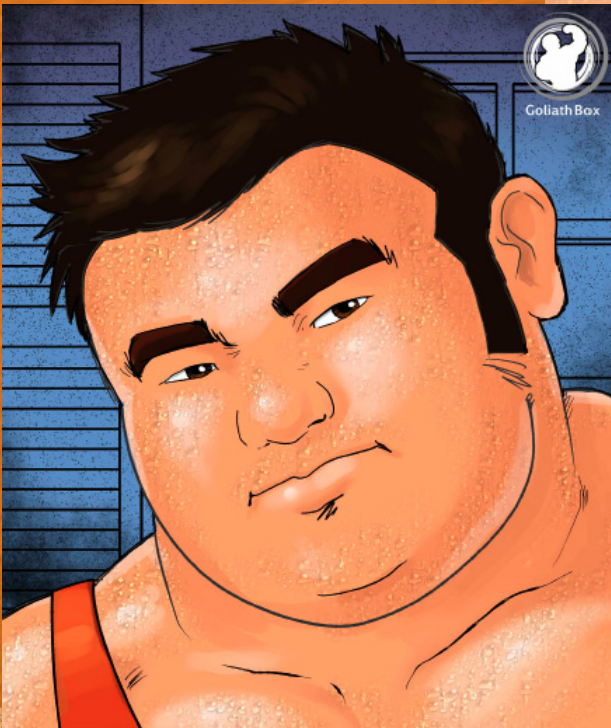
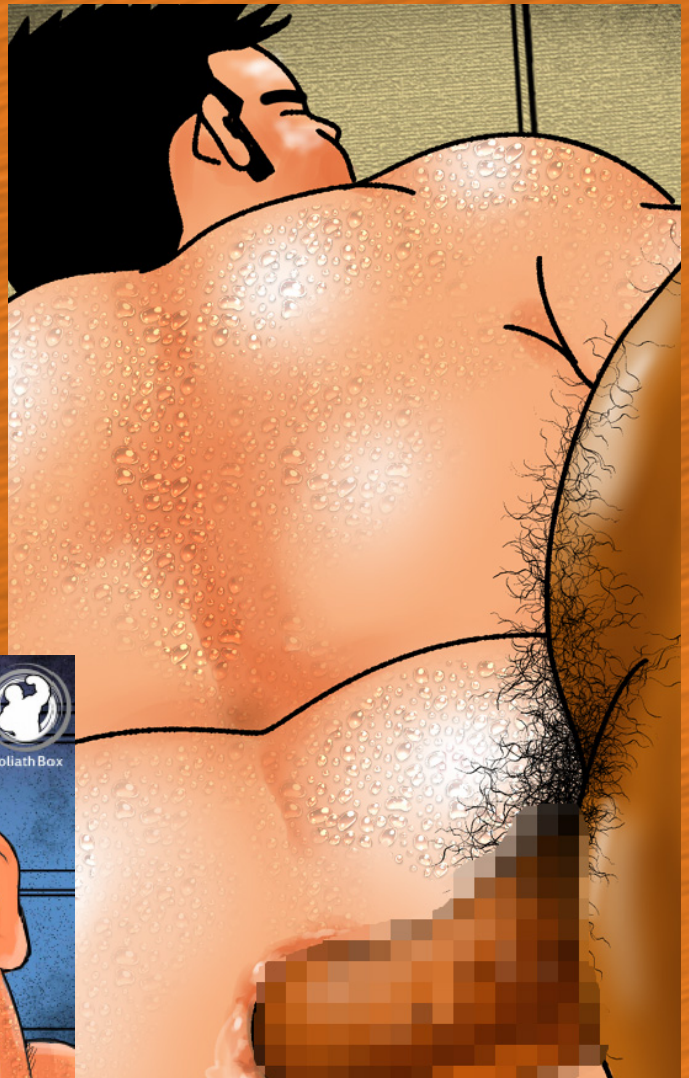
ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 猥想短編小説

カラー  
エロ挿絵

6

枚



## レスリング部員 倉庫でゴックン

猥想短編小説 文 / 画 友野 勇

学園祭間近のレスリング部。

当日のイベント広告のチラシを印刷所に取りに行くよう頼まれたガチデブ橋本。そこで待っていたレスリング部 OB 剛田先輩が.....



ゴリアテボックス  
友野勇の小説

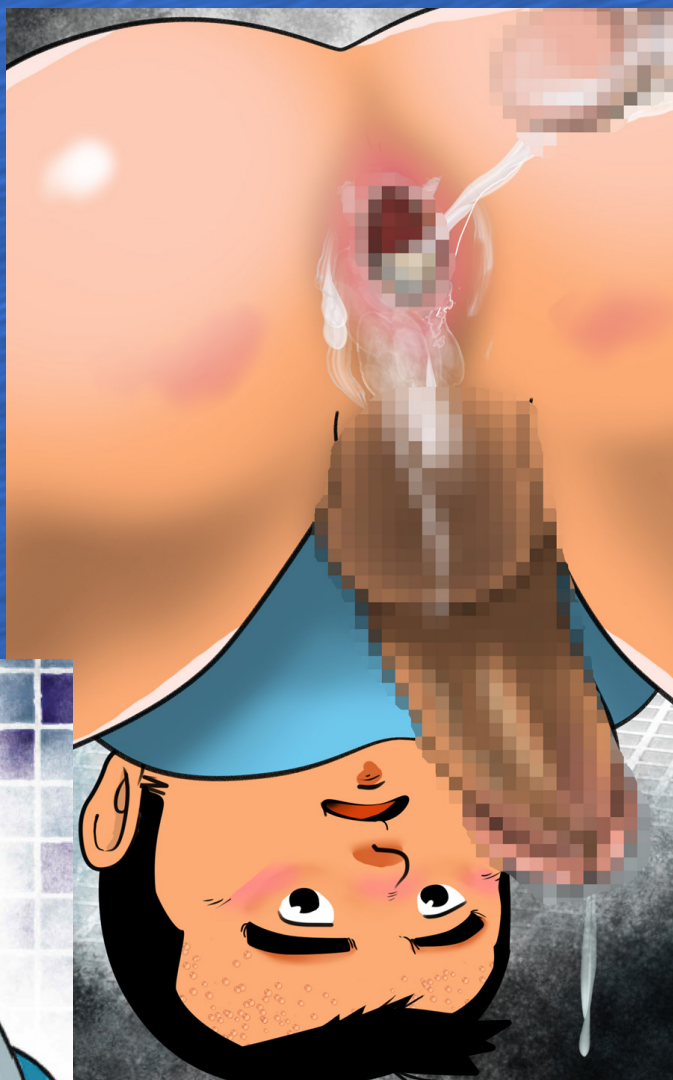
## 猥想短編小説

カラー  
エロ挿絵

7

枚

(差分含む)



## ラグビー部員 銭湯でガバガバ

猥想短編小説 文/画 友野 勇

ガチムチラガーマンの翔太は銭湯大好き！今日はいつも通っている馴染みの銭湯で清掃のアルバイト。でも部活帰りにちょっとお小遣い稼ぎにと思っていたら……



ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 猥想短編小説

白黒  
エロ挿絵

6

枚



## 柔道部員

公衆便所でベチヨベチヨ

猥想短編小説 文/画 友野 勇

朝の練習中、突然もよおして便所へ  
駆け込むガチムチ柔道部員の田島。  
しかしそこは清掃中！作業している  
おじさんに断られたが我慢出来ずに

.....



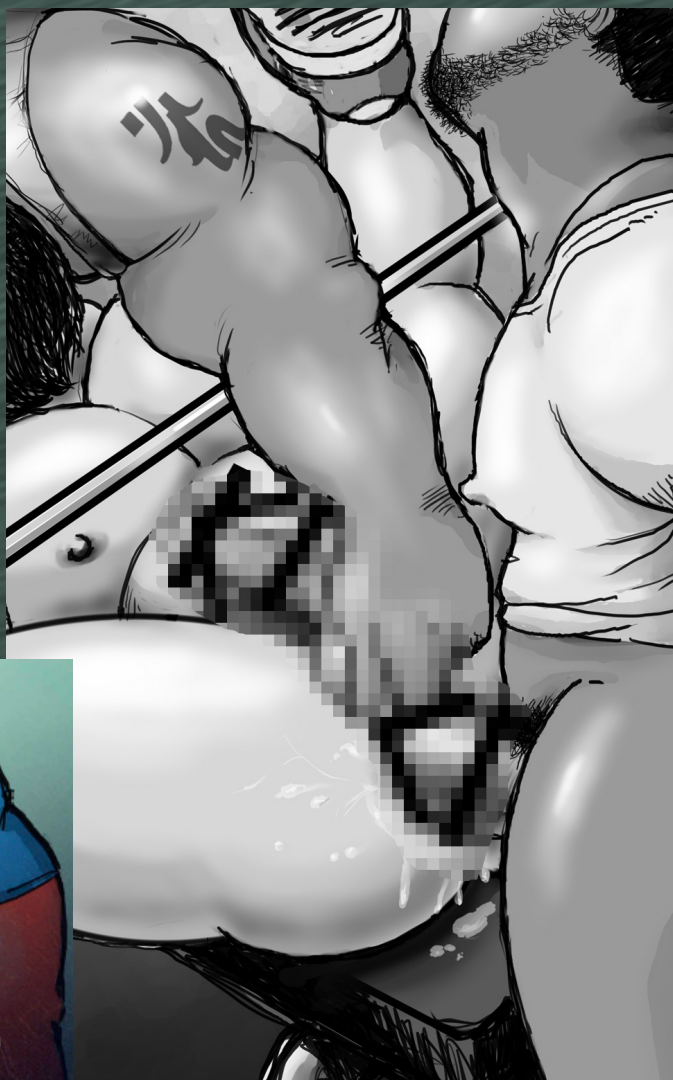
ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 猥想短編小説集

白黒  
エロ挿絵

8

枚



古いアパートのガチムチ男を覗き見する啓介、しかし... (のぞく)  
部屋探しで訪れたへんな不動産屋。格安物件の秘密とは... (変態不動産)  
ネットで見つけた誰も知らないスポーツジム。変態すぎる男たち。(専門ジム)  
短編小説3話です。



ゴリアテボックス  
友野勇の小説

# 猥想短編小説 コレクション

初期の挿絵入短編作品を新たに B5 判で新編集。PC、タブレットで読みやすくなりました。

- ショートタイム猥想短編小説集・のぞく
- ショートタイム猥想短編小説集・変態不動産
- ショートタイム猥想短編小説集・専門ジム
- 柔道部員 公衆便所でベチョベチョ
- ラグビー部員 銭湯でガバガバ
- レスリング部員 倉庫でゴックン
- 行列ができる水球部員
- ハッテンインタビュー

## 猥想短編小説集

友野勇初期創作作品集

短編小説 8 篇

約 70,500 文字

新編集 (B5 判)

本編 167 ページ

全編 224 ページ



## 猥想短編小説 collection

友野勇初期創作作品集 〈Early creations〉



GoliathBox

\*全編にはその他の作品紹介  
も含まれています





**GoliathBox**

← next





ゴリアテボックス  
タッピングゲーム

## 簡単着せ替えゲーム

PDF ビューアで遊ぶ、着せ替えゲーム！

30 パターン以上のコスチュームとゲームクリアでおまけ画像あり！スマホやタブレットでもプレイできます！ガチムチなわがままケンタの満足度100%をめざせ！基本的には1ポーズの差分画像で遊ぶゲームです。複数のシチュエーション（シーン）があるわけではないのでご注意ください。ゲームで使用しているリンクボタンは Adobe Reader 以外のアプリケーションでも動作するものがありますが保証の限りではありません。また、OS や Adobe Reader のバージョンによっては、動作しない場合があります。購入を検討される前に必ず体験版で動作確認するようお願いいたします。



# わがまま

# KENTA の

# 着せ替え ゲーム

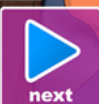
グレーのパーカー

ブルーのブルゾン

1 %



page top



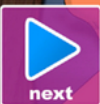
next

こういう感じもいいよね

10 %



page top



next

20 %





**Copyright (C) 2020 Isamu Tomono All Rights Reserved.**